釋迢空短歌私抄 III

著者略歴

明治42年5月4日生。
岡山一中，国学院大学高師部卒。
旧制の中等教員，海軍教授を経て．
敗後，岡山県笹田高等学校長，岡山県立岡山盲学校長。
現在，社会福祉法人盲児施設岡星寮長，岡山商科大学専任講師。
昭和2年8月，「蒼穹」に入社，45年12月まで同人。
昭和7年1月「短歌詩人」の創刊に与り，21年2月「龍」と改めて主宰。
歌集「童貞抄」「朱夏」「地上の塔」「足音」四人歌集「候鳥」「紅岩」「丹塗り舟」「林間徒歩」「遠野の雲」。
昭和30年度岡山県文化賞受賞。
現住所　701-31　岡山市沢田818

釋迢空短歌私抄　Ⅲ　　©1973

昭和48年11月20日　発行　　定価 1,300円

著　者　　服部忠志
発行者　　天久卓夫
印刷者　　田中　忠
発行所　　潮汐社

東京都港区西新橋3-6-10 法令印刷ビル
電話03—433—8746 振替東京55746

大日本法令印刷株式会社印刷製本

3392—0072—4691

釋迢空短歌私抄　Ⅲ

水の上

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

水の上……5
寂しき春……21
鹿籠の海……31
山の音……53
池寺……59
つら杖……67
信濃びと〻共に……85
くさむら……107
曇る汐路……127
乾く春……147
釋迢空私記……173

水の上

水の上

歌集『水の上』は、歌集『春のことぶれ』に続くもので、制作年代から言へば、昭和五年五月に始り、昭和十年七月に終るおよそ五年間の成果四百八十首といふことになる。

うつ〳〵に　心むなしくゐるわれを　つく〴〵と思ふ。やみにけらしも

「うつ〳〵に」は、現代ふうにいへば、うつらうつら、といふところだらう。うつ、は中がからつぽの状態である。うつぎ、といへば茎の中が穴があいて、からつぽの木の意である。ここでは精神の放散状態で意力集中を欠くのであつて、「心むなしくゐるわれ」の状態を強調してゐる。自分がさういふ状態であることを「つく〴〵と思ふ。」のであつて、心底から反省する、といふのである。結論としてこれは健康ではない、「やみにけらしも」となる「うつ〳〵に」、「つく〴〵と」の重用がアクセントをなして、内容に即したリズムを生む。

はろ〴〵に　浮きて来向ふ海豚のむれ。委ら細らに　向きをかへたり

「委ら細らに」は、はつきりと、の意。深く、切に、の気持だ。委曲とか委細とか熟して漢字をあてるところを、分けて当てたものと思はれる。海豚のかしらから背にかけての黒い艶だちが波の間に見えながら、こちらに向かつて来てゐたのが、はつきりと一斉に方向転換を遂げた、といふのである。距離とひろがりと、それが一群の海豚の進行方向によつて描かれる。

やすらなる息を　つきたり。大倭　山青垣に　風わたるなり

昭和五年五月作。「年譜」によれば、「五月、慶応義塾国文科学生と共に、大和・京都へ第一回万葉旅行。京都で民俗学会大会に講演。演題『門』。」とある。四十四歳のときである。「大和の山」、「大神々社」と詞書する二首中の第一首。

大は美称、倭は大和に同じで、現在の奈良県をさすことになる。「大倭日高見の国」などと用ゐる。「山青垣」、青垣山の用例を逆に据ゑて、山にして青垣をなせるもの、の意とした。奈良盆地の周囲の木木繁茂して緑美しい山が、盆地を囲んでさながら青い垣を成す、といふ見方から発する表現てゐる。新緑の山山の大観であつて、万葉時代の文化の中心地に身を置き、研究者であり鑑賞者である立場からすれば、「やすらなる息をつきたり。」となることも自然である。

深々と　山の緑のかさなれるうへに　い寝つゝあり　とし思ふ

「多武ノ峯に宿る」と詞書にある。多武ノ峯はまさに「大倭　山青垣」の一つで、「山の緑のかさなれるうへに」といひ、殊に、なかにと言はないで、「うへに」と発想するあたりはこころが高揚して、「大君は神にしあればあまぐものの雷のうへに庵せるかも」などが意識にあつたかも知れない。緊張し高揚するこころのままに詠みくだしたといふ趣がある。「い寝つゝ」は「寝(ね)つゝ」とも考へられる。

さ夜ふかく　起きて歩けば、山のうへ　神のみ殿に　音こたふらし

「音こたふらし」の「こたふ」だが、一応は、きくであらう。ボクシングなどで、急拠の一撃がよくこたへたらしい、などのこたふで、それは同時に。応答である。「神のみ殿」の充実を実感してゐる。深夜山中を独歩するその足音の反響が、神霊充実してゐる神の住居である「み殿」に届き、はつしと相響く心持である。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

をとめ髪　さだすぎ落つるきのふまで、ひたぶる　われにより来しものを

「古びと一」「ある人の悲しみにかはりて」と詞書がある。「さだすぎ」は盛りの年齢が過ぎ、の意である。機会、時がすぎることから女性妙齢のときがすぎることに用ゐられるのであらう。この歌の内容の具体的なことはよくわからない。博学な作者のこととて、古典の拠りどころをこころにもつてかも知れぬが、多分知りびとの妻との死別に思ひ及んでのことであらう。雄略天皇が召すといはれるのを八十歳まで待つてゐた赤猪子の伝説もあるが、「ひたぶる、われにより来しものを」といふのは、夫ひとりをたよりとした妻の純粋な愛への回想なのであらう。「落つる」は「をとめ髪」にかかる。「きのふ」の具体提示によつて、現実感が増すことになる。

発哺

ながくと　山のかけすは鳴きにけり、昼間の霞　谷にくだらず

「年譜」、昭和五年の項に「八月、中旬、信州上林温泉から発哺を経て草津へ出る。」とある。かけすの声は大きくけたたましい。川村多実二博士の解説を引用しよう。「胴体は飼鳩より少し小さいが、尾が長いので割合に大きく見える。雌雄同色、体は葡萄色、頭は白地に黒色縦斑、眼の周囲、翼の風

切羽、尾が黒、畳んだ翼の中部と腰が白い。全体としては派手な色彩の鳥で、或る地方では鳩の種類だと思いカシバトと呼んでゐる。木の実を嗜食するが、鴉科の鳥であるから雑食性で昆虫や鳥の卵や雛を呑むことさへある。鳴声はジャージャー、或はギャーギャーときこえ、嗄れ声で英名のJayも鳴声からきてゐる。他鳥の声を真似ることが巧みで、時に人語や楽器、鋸の音まで真似ることもあつてだまされる場合が少くない。」とある。カケスは懸巣、カシバトは橿鳩の意である。橿鳥といふのも同じだ。

霞は谷にたち、谷からあがるものだが、それが山の中腹にとどまり、家居のあたりにたちこめる。その状態のままでゐるのを「谷にくだらず」と言つて常套を脱した。「鳴きにけり。」と言ひ切つて、かけすの声の余響をひきながす趣がある。

青山は、尾谷重れり。いこひつゝ、黄なる樺(カンバ)の葉を　こきにけり

「尾谷」は、嶺や谷の意。「春霞峯にも尾にも―」といふ具合になれば、山のすその長くひいたところになるが、「尾の上に降り置ける雪し―」となれば、みねの意で、作者は万葉ふうに後者の意に用ゐてゐる。「黄なる」は樺だけにかかるのでなしに、「樺の葉」までひつくるめてかかる。葉が黄いろなのである。白樺の葉の黄いろになつてゐるのを手にしごきおとしたのだ。「稲をこく」といへば稲の穂から籾をおとすことである。

明け昏れの空の　暗さに、飛び交ひて鳴く燕のこゑ　あはれなり

「明け昏れ」は、夜の明けがたまだ暗い時をいふ。『源氏物語』などにも用例がある。「あけくれ」と澄んで言へば、明け暮れの意で、夜明けと日の暮れと並べて現代語として使ふやうである。「かはたれどき」の意と解してよい。鳥は早起きである。人家に親しい燕が早朝暗いうちから潑剌たる短い啼き声を戸外にたてながら飛びかふのを、こころに沁みる思ひで見且つ聞く趣である。

湯の山の人のくらしの　やすくして、甑を据ゑぬ。穂薄のなか

「甑」はいまの蒸籠にあたるもので、「古語辞典」には「穀類などを蒸す道具。鉢形の土器の底に小穴があり、湯釜にのせ蒸すもの。中国では殷・周の時代から、日本では弥生式文化の初期から用いられた。平安時代以後は木製が普通。」と説明してゐる。今日では、赤飯のとき以外には蒸した飯はつくらぬのが普通だが、中国の北京あたりでは、平時の飯を蒸すことを戦時中ぼくは実地に体験した。わが国でも昔は蒸飯が普通であつたやうで、今日の飯は固粥にあたるものである。風呂敷一枚で飯を炊いたといふ山窩の方法も、蒸飯以外には考へられないことだ。湯の山の人のくらしが簡易生活に徹

して、それゆゑに身すぎのしやすいと観じ、その具体的な所見として穂薄の中に据ゑた甑をもつてした。

「―人のくらしの　やすくして、」は特別なニュアンスをもつ言ひ方で、前出、昭和職人歌中、朝鮮人足と題する「ふる国も　こゝも　住みよし。妻も　子も、人のそしりに　安けぎ　見れば」の歌における「ふる国も、こゝも　住みよし。」の言ひ方に似てゐる。最低生活にまでおちつくした安らぎであつて、朝鮮人足が本国朝鮮も出稼ぎさきの内地も住み難いのだが、人のそしりにいまは安んじて、悲しい諦めのもとに自足の境地にあるといふのと同じである。一首を貫通する抒情の哀感はそこにあるのであるから、この「やすくして、」を味読しなければならぬ。

山高み、日くるゝおそし、青山の色より青き池の面見ゆ

山が高くて、日がくれるのがおそい。もとより夕日を遮るものがないからである。作者はその高い山中にゐる。「青山の色より青き」の一語によつて生彩を生じた。

湯の臆の山　ほのぐらし、近々と　青き薄の穂をちぎるなり

「湯の臆の山」とは省略した言ひ方であつて、温泉入浴場のまどから見える山、の意だ。いはばま

どを額縁として見る山、である。そこに近く生えてゐる青い薄、薄には穂が既に出てゐるのだが、その穂をちぎることだ、といふのである。ひと稀な山の湯と、そこの寂寥が所在なく意味のない仕草を通して描出される。遠近感が鮮明なのは、「―山　ほのぐらし。」と「近々と　青き薄―」の立体的な構図にある。

山深く、湯屋もいで湯も萱ごもり　をり〳〵人の動きつゝ来る

「湯屋」は湯を浴びる小屋である。浴場の施設といふことになる。「いで湯」はそれに対して湯の湧く場所で、湯気などが立ちのぼつてゐると思へばよい。「萱ごもり」は、萱のなかに埋もれたやうになつて、の意。これはひとつの名詞ではなくて、動詞の連用形、つまり中止の姿である。萱ごもりにある、といふふうにとらないで、萱にこもつてをり、といふふうに理解すべきであらう。「をり〳〵　人の動きつゝ　来る」で注目すべきは「―人の動きつゝ」である。「来る」といふだけであれば、先方がこちらに近づく、先方が自分との距離を縮めるといふ直線的な結果への指示だが、その過程を示すものとして「動きつゝ」がある。わかりきつたこととして無視される経過の描写が、このやうになされることによつて、祝詞などに見られるたんねんな表現が遂げられ、一種の重量をも生むのである。

山びとの　言ひ行くことのかそけさよ。きその夜、鹿の峰をわたりし

年くれて、春は到るのである。年末年始のときの山だ。山びとの道を行きながらの会話、それが下の句である。鹿の行動が正確に描かれてゐることにも注目すべきであつて、鹿の夜行性、それに「峰をわたりし」もかりそめでないことがわかる。山を移動するのに、谷や中腹を行かないで、山の峰、稜線を移動するのである。展望によつて方角をも確めるのに便利がよからうし、おそらくは足許の草も短い。鹿だけでなく、昔は人間も山の稜線を通ひ路としたのではあるまいか。溪谷からさかのぼつて、峰に出で、峰を通つてくだる旧道はすくなくないのである。「―わたりし」と終止形にしないで、連体形にしたのも、「言ひ行く」にかへる心持がある。

湯の山に　ひとり久しき　年くれて、せど山のべに　花を覓(モト)むる

「ひとり久しき」がもしも「ひとり久しく」であるとしたら、原作との差はどういふものかを一考するのもよからう。「―久しき」は年にかかつて、年が主となり、「―久しく」は、ひとりの自己を直叙して中止し、別に年を言ひおこすことになる。「せど山のべに　花を覓(モト)むる」だが、実際的には

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com